

高岡鑄物師の北陸惣代役について

笹 本 正 治

はじめに

富山県高岡市は日本の鑄物業を代表する土地で、梵鐘などの多くがここで鑄造されている。養田実氏はこの高岡の鑄物師に関係して『高岡銅器史』で、真継家文書の寛永一八年（一六四一）付け『諸国釜屋所』の中に見える

高岡

北国惣代

越中国

矢木田三郎右衛門藤原家重

大工北野源右衛門藤原国光

仁安御繪旨御本紙

御倉下知状有り

という部分に着目し、

この鑄物師矢木田三郎右衛門藤原家重は前述の通り真継家台帳の高岡の項に登録されている筆頭であり、しかも北国惣代である。

高岡開町以来三十年も経った時代の真継家文書に七人の鑄物師の名は一人も出ていないで、この矢木田三郎右衛門藤原家重と北野源右衛門藤原国光の二人だけが鑄物師として登録されており、しかも前者は北国惣代であり後者は大工であるということとは重大な問題と言うべきであろう。

しかも今日地元高岡においては、この創設の頃の代表者二名

が二人とも消え去ってしまい、その片鱗さえも現われてこないのである。（中略）

西部金谷から移住したといわれる金森、喜多などの七人衆には、真継家台帳に登録されるような藤原朝臣御鑄物師を名乗れる資格を有する者が居なかったものか。後代寛永年間に至っても真継家台帳の高岡鑄物師は、前述のように矢木田であり、しかも矢木田が北国惣代なのである。（中略）

此の高岡ばかりでなく北国を代表する矢木田三郎右衛門藤原家重という鑄物師は、一体どう言う人物であってどこから来たものであるのか。あるいはまた実際には高岡に居住していなくて名義だけの人物であったものか。そのような事は当時の状況からみてあり得ることとは考えにくい、もしそうであるとしてもそれならばどこに住んでいたものであるのか。この重要な問題を永遠の謎の中に埋没させてしまうことは誠に遺憾と思われる。

というように、高岡鑄物師の出発点をなしたともいえる矢木田三郎右衛門は、どのような人物かと問題提起をした。

そして次のように一応の結論付けをした。

一応假りにまとめるとすれば、大工源右衛門という相当資格の取れそうな北野源右衛門がいて、先に金屋に移った七人が彼を必要として申請した。その許可を得て北野は高岡に移って藤田と改姓した。これが中心人物で、矢木田は京都かどこかに居た

が名義を借りて、北国惣代になった。これで発足したが、宝永の頃これらの二人は消えて他の人たちの組織が固められた。というようなことにでもなろうか。まだ検討を要することである。⁽²⁾ 養田氏も矢木田氏についてはっきりした結論を出さないままにいる。寛永一八年(一六四一)に矢木田氏は果たして実在したのか、それとも本当はいなかったのか、から始まって問題は尽きない。特に矢木田氏で注目されるのは「北国惣代」という肩書きである。この肩書きはどんな意味を持っていたのか、また真継家と矢木田氏の関係はどのようなものであったのだろうか。こうした課題は、近世初頭の地方鑄物師と真継家との関係の実態を追及する素材になるであらう。

高岡は日本を代表する鑄物産地であるだけに、その歴史にかかわる研究も多い。⁽³⁾ にもかかわらず、その歴史については不明な点が多い。このように歴史をわかりにくくしている要因の一つが、近世に全国の鑄物師を支配したとされる真継家との関わりではないだろうか。

そこで本稿においてはこの矢木田氏、およびそこから派生したといわれる高岡鑄物師の北国惣代という役割について、特に真継家との関係に注目して考察を加えたい。これによって地方の鑄物師と真継家の関係の一端も明らかにできるだろう。そしてこの問題は単に高岡鑄物師と真継家との関係だけにとどまらず、真継家の鑄物師支配の性格を解く鍵を秘めているように思われる。

註

- 1 養田実・定塚武敏責任編集『高岡銅器史』二八四頁(高岡銅器協同組合・一九八八)

2 同右二九五頁

- 3 飛見丈繁編『高岡鑄物史話』(私家版・一九五四)、和田一郎『高岡市史』(一九五四)、板倉勝高「中居鑄物師と高岡鑄物師の地域的抗争」(信州大学教育学部研究論集 第一六号・一九六五)、可西泰三「銅炎―高岡金工のあゆみ―」(高岡金工誌編集委員会・一九八〇)、喜多万右衛門「鑄物の年輪―高岡鑄物師史料解説―」(金万鑄工株式会社・一九八三)、中川弘泰「越中の鑄物師」(近世鑄物師社会の構造 近藤出版社・一九八六に収録)

一 真継文書などからの関係文献

残念ながら、現在名古屋大学文学部が所蔵する真継家文書の中には、養田氏が見たという寛永一八年(一六四一)付けの「諸国釜屋所」という史料は残っていない。⁽¹⁾ 養田氏が見たのは真継家文書に残っている「旧書覚」とは異なるという。真継家では全ての文書を名古屋大学に譲ったわけではなく、同家にとって重要なものは手元に残したようなので、養田氏はその子孫の楠氏の御宅に問い合わせているとのことであるが、その後、実物は見付かっていない。

さて、真継家文書の近世中期以降に書かれたと思われる帳簿の中に、「廻国免許下知 御蔵民部少輔元弘元和年中 御公用被仰付候受領之面々」がある。それには次の記載がある。

越中高岡 北国惣代

大工 矢木田三郎右衛門尉藤原家重

北野弥右衛門藤原国光

仁安御綸旨御本紙御蔵下知状

同富山

河辺助兵衛藤原家政

山本五郎左衛門藤原家種

御蔵下知状有

同富崎

増田九郎左衛門尉藤原家春

同 太郎右衛門衛藤原家次

天福御繪旨本紙御蔵下知状有

この記録が何をもとにして書かれたのか不明で、しかもこの帳簿自体は近世の新しいものであるが、近世中期以降に真継家の側で、少なくともこのような情報を得ていたことは疑いない。これが事実とすれば、矢木田三郎右衛門は元和年中（一六一五～二四）に既に真継家と関係を持っていたことになる。

近世中期以降に書かれた『調備志』と題される帳簿は、中世にさかのぼると思われる史料の確認をしている。この中で越中に関わる部分のみを取り上げると、

越中 仁安二

仲間中

天福

増田九郎左衛門

同 太郎右衛門

下知状并旧書

越中

増田九郎左衛門

同 太郎右衛門

年貢催促状

長井治右衛門

御繪旨

越中

仁安

高岡

矢木田三郎右衛門

下知状

北野弥右衛門

下知状

富山

川辺助兵衛

山本五郎左衛門

天福

富崎

増田九郎左衛門

同 太郎右衛門

仁安二

越中

矢木田

高岡

北の

天福

越中富崎

増田兩人

つまり、ここには養田氏が指摘された北国惣代という言葉はないものの、矢木田三郎右衛門と北野弥右衛門が、旧書（中世以前に御蔵の家から出された先書）を持つ特別な家として記載されているのである。そして、これは前掲の史料より情報量が多くなっている。

次に同じように近世の中期以降に書かれた帳簿で、『調備志』より先に出来、かつ真継家が最も頻繁に用いていたと思われる『旧書覚』から、越中の部分だけを取り出してみよう。

△越中

射水郡高岡

本

釜屋所

仁安二宝永二十一二日

喜多万右衛門

北国頭役之下知状

金森弥右衛門

彦兵衛

久右衛門

権兵衛

孫左衛門

源兵衛

清兵衛

五郎右衛門

弥兵衛

砺波郡西部

何レモ休職ノ由文化二八月

高岡ヨリ届書来ル

釜屋屋兵衛

同 藤吉郎

同 彦作

同 宇平

同 九左衛門

同 太郎右衛門

同郡西保

小野次郎右衛門

同 三郎右衛門

同 与次兵衛

同郡高宮

金屋市助

婦負郡富崎村

惣鑄物師

當時断絶之由

御退位廻状「」京

留守居通達有之也

新川郡富山金屋

川部与右衛門

惣仲ヶ間中

砺波郡福野村

病身ニ付親族之由同郡内苗加村川辺次郎右衛門へ

再興ノ願寛政七卯三ノ十八日御許容清吉弟

和平ノ願也

永井清吉

同郡相木村

長井権兵衛

新川郡富山上金屋

山本五郎右衛門

内部に記載されている記事でもわかるように、この帳簿は古い文書を前提にしながら鑄物師を確認し、その動静について次々に書き加えたもので、越中の記載は文化二年（一八〇五）まで付け加えられている。ここで高岡鑄物師の肩書は「北国頭役」となっている。

これらの史料に見える仁安二年（一一六七）一一月の藏人所牒は、現在も高岡市金屋本町が所蔵しているが、この仁安の牒は仁安二年に書かれたのではなく、真継家が戦国時代ぐらいに偽作して配布したと考えられる。また、下知状というのも真継家の前身の新見家、もしくは真継久直か康綱あたりが出した文書と推察される。金森弥兵衛の家には天正一二年（一五八二）九月に、彼を「藤原朝臣国友越中目」に任じた口宣案があったようである。この名前は「大工北野源右衛門藤原国光」と「国」という共通性をもつので、何らかのつながりがあるかもしれない。ともかくこのことから、戦国時代に高岡鑄物師の前身にあたる西部金屋（高岡市）の鑄物師と、真継家とが接触を持っていたことはほぼ確実である。

ところで、高岡鑄物師に関係して私がこれまで様々な文献などから確認した中では、喜多万右衛門氏の家に天正五年（一五七七）二月九日付けの鑄物師職許状、宝永二年（一七〇五）一一月二日付けの北国頭役任命書があったという。天正五年の許状についてはまだこの当時に鑄物師職許状は出されていないことから、事実は疑わしい。後者については、宝永二年に高岡鑄物師惣中に出た文書を指しているのであらうか、この点不明である。実際の喜多家には該当する文書はない。

註

1 真継家文書については、名古屋大学文学部国史研究室編『中世鑄物師史料』（法政大学出版局・一九八二）、および拙稿「真継家文書の概略について」（信州大学人文学部『人文科学論集』二四号・一九九〇）を参照してほしい。

2 『高岡銅器史』口絵三頁

3 網野善彦「偽文書について―その成立と効果―」（『書の日本史』第四卷・平凡社・一九七五、この論文は氏の著書『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店・一九八四に収録）

4 村内政雄「由緒鑄物師人名録」（『東京国立博物館紀要』第八号・一九八七）

二 北国頭役について

宝永二年（一七〇五）十一月二日に、真継珍弘は高岡鑄物師惣中に北国頭役を申し付けた。真継家にはこの文書の写などは伝わっていないが、飛見文繁氏は次の写を示している。

申渡下知状之事

越中国射水郡高岡町の鑄物師中、従先規北国筋の鑄物師頭役申付置候処、弥以商売之儀念入、並に新釜屋出来無之吟味可仕候者也、仍而下知状如件

宝永二年十一月二日

從五位上御藏真継刑部少輔紀珍弘判

越中射水郡高岡町鑄物師御中

この文書は真継家文書に残る「諸国許状留一 珍弘」の中にはないが、事実とすると「従先規北国筋の鑄物師頭役」とあることから、以前よりこの役は高岡鑄物師全体に課せられていたことになる。後

述のようにこのような役割は、普通特定の家が個人が負うものである。それなのに、「高岡鑄物師御中」と集団がその宛名になっていることは問題とならう。

飛見文繁氏の所蔵する文書の中には宝永二年二月二日に、御藏宮内大丞（珍弘）から越中高岡鑄物師惣代利兵衛と十兵衛にあてた、仁安の牒を拝見したがこの後もその家を再興するようにという、鑄物師職許状がある。このことからすると、高岡鑄物師のこの時の主体はこの兩人になり、頭役を負ったのも二人の可能性が高い。

ちなみに、高岡鑄物師の中心をなした家の一つである喜多家には、為當年貢催促使者下向候、任先例員数可致其沙汰之状、如件

慶長七年三月 日

御藏源太夫（花押）

という文書がある。同文の文書が慶長一二年（一六〇七）にも出ており、真継康綱の時代に当時西部金屋に住んでいた喜多家と真継家とが接触を持っていたことが知られる。高岡金屋町には「天皇御璽」の朱印が捺された仁安二年（一一六七）十一月付けの蔵人所牒がある。この印が捺された文書は真継久直によって配布された可能性が大きいので、久直の時期に両者が接触していたことも十分に考えられる。

また、喜多家には次の文書もある。

當年貢料之事、催促以前任累代之先規致献上之条、神妙至也、

仍富貴可繁栄之状、如件

宝永貳年十二月二日

從五位下

御藏宮内大丞紀珍弘（花押）

越中高岡

喜多万右衛門江

この文書が、先の康綱の文書を前提にして出されていることは疑いない。利兵衛と十兵衛あてに同日に文書が出ていながら、別にこの文書が与えられていることは、高岡における喜多家の特別な地位を語るものだろう。

『諸国許状留一 珍弘』によると、珍弘は貞享五年（一六八八）二月一七日に越前国五十分一村（福井県武生市）に年貢の催促をした。ついで、元禄九年（一六九六）二月に美作国津山の鋳物師与右衛門尉へ、仁安の牒を拝覧したので、以後職業に励み家を再興するようにと判物を出した。喜多家の文書はこの帳簿のなかには採録されていないが、珍弘のきわめて初期の鋳物師にあてた文書だといえる。そしてこれには正徳四年からの鋳物師職許状には捺されている「御蔵真継」や「珍弘」の朱印も捺されていない。ともかく、喜多家が高岡に来る以前から真継家と接触をもち、珍弘の代にも大変早い時期から連絡を取っていたことは注目される。

話を北国惣代に戻そう。真継家文書中の『諸国許状留一 珍弘』に次の許状がある。

越中国福野村鋳物師和泉少掾藤原信成弟源兵衛儀、加賀国并越前国、右三ヶ国ニ而釜致商売不有相違者也、若於異乱有之輩者、早々言上可仕者也、依如件、

禁裏諸司従五位上藏人方御蔵真継刑部少輔珍弘判

正徳四甲午年十二月七日

越中国砺波郡福野村

鋳物師和泉少掾弟

源兵衛

この文書はこの記録の中で九番目に古く、近世中期に真継家の鋳

物師支配を再興した珍弘の出した文書としても比較的早い。ここで注目されることは、源兵衛の活動域が越中・加賀・越前の三ヶ国に及んでいたという事実で、これらの地域が一つの経済的なまとまりをなしていた可能性を示す。なおこの文書の写は現在真継家文書の中にも残っている（A1-22、番号は真継家文書の仮整理番号）。つまり、この文書を前提にして考えるならば、北国筋の実態は越中・加賀・越前ということになる。注目されるのは能登が消えていることである。能登には有名な中居鋳物師が古くから存在しており、その商圏に新興の高岡鋳物師などは到底食い込めなかったためと思われる。

ところが、東京国立博物館所蔵の『由緒鋳物師人名録』の「射水郡高岡金屋町鋳物師一統旧書を掲ぐ」には、次のような記載がある

- 仁安二年御牒本紙
- 天福元年十一月御紋写
- 文治五年將軍家下知状
- 慶長年中奉書二通
- 天正年中請印
- 宝永年中繪旨改書
- 同年北陸道七ヶ国頭役
- 正徳年中同
- 享保二十年書
- 宝暦年中書
- 明和年中同
- 寛政年中同
- 座法写
- 灯籠之御書

○同年内侍所参内済之書

○文政六年ヨリ文久二年迄許状百巻通

○寛政三年孝明和七年迄通

高岡金屋町鋳物師中ノ所持也⁽⁶⁾

この史料は明治一二年(一八七九)に写されたもので、近世末において真継家がどのような鋳物師とながりを保持していたかをよく伝えており、各地の鋳物師が持っていた古文書も整理してある。この記載によれば、高岡の鋳物師は宝永年中に北陸道七ヶ国の頭役を命じた文書を所持している。これは前掲の宝永二年一月二日の北国頭役を申し付けた文書のことであろう。その場合、宝永二年の文書には北国筋とあっただけに、ここでは北陸道七ヶ国と読み替えていることが特に注目される。北陸道七ヶ国とは周知のように、若狭・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡の七ヶ国である。このことは宝永二年から近世末までの間に、高岡鋳物師にとっての北国筋の実質的な概念が大きく拡大されたことを示す。

正徳四年(一七一四)一〇月二十五日には、珍弘が仁安の牒を拝覧したとして次のような文書を出した。

仁安御宇蔵人所御牒遂拝覧矣、無紛失所持尤也、宜備後代
 亀鑑矣、抑鋳物師所職永繁栄可為其家再興也、仍任先例状
 如件

正徳甲午年十月二十五日

禁裏諸司従五位上蔵人方御蔵真継判部少輔

珍弘判

越中国射水郡高岡町

鋳物師北国筋惣代

宗兵衛

弥右衛門

外四十七人⁽⁷⁾

『由緒鋳物師人名録』によれば、「正徳年中北陸道七ヶ国頭役」を高岡鋳物師惣中であてて命じた文書が存在したようであるが、それがこれであろう。ただし『諸国許状留一 珍弘』にはこの文書は採録されておらず、真継家の中にはそれに類するような史料も見ることができない。ここでは文書の文章で鋳物師の家を再興するようにせよと述べ、宛名の肩書きとして「鋳物師北国筋惣代」としている。

正徳五年(一七一五)二月九日、喜多万右衛門に真継珍弘から鋳物師職許状が与えられた。以下、真継家が高岡の鋳物師にあてた文書をざっと確認しておこう。『乙 諸国許状之案 矩弘代』によれば、享保二〇年(一七三五)六月に高岡の鋳物師惣中であてに許状が出ている。『丙 諸国許状案 親弘代』には、宝暦四年(一七五四)九月に鋳物師惣中であてて許状を出したとある。またこの時には鋳物師惣中であてて「定」という、鋳物師職座法が真継家から与えられた⁽⁹⁾。

『諸国許状留 四 量弘』の記載から、明和七年(一七七〇)九月に高岡町の鋳物師惣中に鋳物師職許状、および文治五年(一一八九)四月一九日付けの源頼朝袖判御教書が渡されたことが知られる。これに対して高岡の鋳物師たちは九月四日に請印を出している。また、天明元年(一七八一)六月には同じ鋳物師惣中であてて、天正四年(一五七六)八月一三日付けの、御蔵宗弘が定めたという鋳物師職座法の写が配布された⁽¹⁰⁾。

文化八年(一八一)二月には天福元年十一月の藏人所牒の写が与えられ、裏菊の紋の使用が許可された。¹³⁾ 文政七年(一八二四)以降は鋳物師個々に対する鋳物師職許状が、沢山出されるようになる。しかしながら北国筋の頭役などを認めた文書は出ていない。

元治元年(一八六四)一〇月一七日付けの真継家役所からの献上灯籠についての廻章は、諸国鋳物師として「越前・加賀・能州・越中・越後・信州・甲州鋳物師中」が宛名になっている。¹⁴⁾ この宛名の国々を北国筋とすることはできないだろうし、その筆頭には越前国が出てゐる。もし高岡鋳物師が北国筋の頭役なら、北国筋はそれだけで独自の組織をもち、それを高岡鋳物師が通達するはずであるが、そのような事実はない。また、ほかにもそのような文書は知られていない。

以上からすると、北国惣代は近世になって写された元和年中(一六一五〜二四)のものと思われる「廻国免許下知」に、北国惣代として大工の矢木田三郎右衛門藤原家重と見えるのが帳簿上の初見で、続いて同じ記載が養田実氏の提示された寛永一八年(一六四一)の「諸国釜屋所」にある。その後宝永二年(一七〇五)に真継家は高岡鋳物師惣中に北国筋の鋳物師頭役を申し付けた。これは正徳四年(一七一四)に再度確認された。その後真継家から高岡の鋳物師に北国筋の鋳物師頭役を命じた、確実な文書は出ていない。

註

- 1 飛見文繁編『高岡鋳物師史話』五九頁(私家版・一九五四)
- 2 飛見文繁編『高岡鋳物師史話』四〇頁
- 3 喜多家の古文書については、喜多万右衛門「鋳物の年輪―高岡鋳物師史料解説―」(釜万鋳工株式会社・一九八三)が活字にしている。

- 4 網野善彦「偽文書について―その成立と効果―」(『書の日本史』第四巻・平凡社・一九七五、この論文は氏の著書『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店・一九八四に収録)
- 5 長谷進「中居鋳物史」(『穴水町文化財保護専門委員会』一九七〇)
- 6 村内政雄「由緒鋳物師人名録」(『東京国立博物館紀要』一一号・一九七一)

- 7 飛見文繁編『高岡鋳物史話』五九頁、なお高岡鋳物師の史料は喜多家文書と飛見文繁氏の集められた文書しか残っていない。
- 8 真継家が各地の鋳物師にあてた文書の概略については、拙稿「近世真継家配下鋳物師人名録」(1)・(2)(『名古屋大学文学部研究論集』史学二八・二九・一九八二・一九八三)を参照していただきたい。
- 9 飛見文繁編『高岡鋳物史話』六〇頁
- 10 『中世鋳物師史料』一九六頁、この時に与えられた文書と思われるものが飛見文繁編『高岡鋳物史話』四七頁に載っている。
- 11 飛見文繁編『高岡鋳物史話』六一頁
- 12 飛見文繁編『高岡鋳物史話』六二頁
- 13 飛見文繁編『高岡鋳物史話』四三頁
- 14 飛見文繁編『高岡鋳物史話』一三頁

三 戦国時代の真継家の動向と北国惣代

前章まで、記録や古文書から高岡鋳物師と真継家との関係を、北国惣代の任命ということを中心に確認してきた。それでは、実際に当時の真継家は矢木田氏に北国惣代というような役割を任命でき、それを実効を持ちうるものにしていくことのできる力を持っていたのだろうか。本章ではこの点について考察してみたい。

先にみたように、記録だけからいうと矢木田三郎右衛門の名前は元和年中(一六一五〜二四)に見える。では真継家の歴史からする

と、この時期にどのような特徴を持つ行動を当主がしていたのであろうか。

既に網野善彦氏によって明らかにされたように、長らく鑄物師支配を行ってきた新見家は戦国時代に真継家に取って代わられた。⁽¹⁾すなわち新見家は長らく御蔵小舎人として鑄物師支配を続けてきたが、有弘の時に財政が破綻して、京都の町衆である真継新九郎からかなりの借財をした。このため有弘は天文八年(一五三九)に一旦跡職を実子の弥三郎に譲ったけれども、これを悔い返して新九郎の子の久直に譲った。天文十二年(一五四三)三月に新見家の側から久直の行動を不当とする訴えがなされたため、久直は有弘の譲状を証拠として提出し、後奈良天皇から正式に有弘の跡式相続を確認された。その後天文一五年(一五四六)には弥三郎の子の富弘が久直の不当を朝廷に訴え、両者の間で激しいやり取りがなされたが、結局久直の勝訴となった。

久直が新見家を相続したのは、鑄物師を支配する家だという点に着目し、鑄物師支配を再興することで収入を得ようとしたためと考えられる。彼の活動は富弘に勝ってから本格化し、天文一七年(一五四八)以降は当時大きな勢力を誇っていた大内氏に働きかけて、中国・九州地方の鑄物師と連絡を取った。これが成功して、久直の鑄物師支配の基礎が固められた。この際に久直は文書の改ざんなどを行っており、偽文書も作成されたようである。

久直は永禄元年(一五五八)六月に正親町天皇から、改めて有弘の跡式の相続を確認され、永禄九年(一五六六)には天皇即位を契機に諸国の鑄物師に主殿寮の釜釜を調達させて、鑄物師との連絡を密にした。ここに朝廷に奉公するために鑄物師を支配するという、真継家の全国鑄物師支配の名目と、組織がある程度完成した

といえる。その後久直は織田信長や豊臣秀吉と結び付いて、支配域を拡大した。⁽²⁾久直は天正一八年(一五九〇)頃まで活動し、慶長三年(一五九八)六月に没した。

久直の子供が天正四年(一五七六)に鑄物師職座法を制定した宗弘とされるが、花押からして宗弘は久直と判断される。⁽³⁾久直の鑄物師支配は久直とは血縁関係にない康綱が引き継いだ。⁽⁴⁾彼は鑄物師の支配域を関東まで伸ばし、慶長三年(一五九八)には吉例による臨時課役として指燭常灯の献上、慶長六年には女院が東御所へ移るのに奉公などを命じた。彼は寛永元年(一六二四)に亡くなった。喜多家にある慶長七年の年貢催促状は彼の出したものである。

康綱の跡を継いだ康利は慶長一四年(一六〇九)に父とともに例幣使に任ぜられ、以後度々奉幣使を勤めた。一方鑄物師支配では、寛永五年(一五二八)三河牛久保(愛知県豊川市)鑄物師の争論に判物を出している。⁽⁵⁾しかし彼の出した文書は少ない上に、鑄物師支配の内容のものがほとんど伝わっていないことから、康利は例幣使の役割に力を注いで、鑄物師の支配には積極的ではなかったと判断される。

康利は寛永一八年(一六四一)に亡くなり、親賢が継いだ。彼は家督を相続して間もなく、他家を継いでしまった。このため彼についての事跡はほとんど伝わっていない。

その跡は出納河越重忠の子供の久忠が相続した。正保四年(一六四七)に例幣使が再興されると、以後その任にあたった。彼は約四〇年間も真継家の当主としてあったが、鑄物師支配に関する文書はわずか三点しか知られていない。

久忠は延宝六年(一六七八)に没し、彼と康利の女との間に生れた玄弘が後を継いだ。彼は貞享元年(一六八四)に四四才で亡くな

り、経歴はほとんど伝わっていない。

こうして、康綱の没後四代にわたって真継家では鋳物師の支配を極めて細々としていたにすぎなかった。

玄弘に子供がなかったために、その跡は岡三左衛門則盛の子供の珍弘が相続した。彼によって真継家の鋳物師支配は新たな局面を迎えることになる。まず貞享四年（一六八七）に越前国五分一村の六左衛門に年貢徴収についての判物を出した。珍弘によって真継家の鋳物師支配の典型として思い浮かべられることの多い、鋳物師職許状などを鋳物師に配布してその代わりに礼金を取るという方法が確立したのである。高岡の鋳物師に珍弘の時代から真継家が連続して文書を出しているのはこの理由による。

さて、このような真継家の歴史を見たらうで、矢木田氏の問題を考えてみよう。矢木田家重の名前が見える最古の史料は、「廻国免許下知 御蔵民部少輔元弘 元和年中 御公用被仰付候受領之面々」である。ところが真継家の系図や由緒書に元弘の名前を見ることはできない。元和年中（一六一五～二四）の真継家の当主は康綱であり、彼は慶長四年（一五九九）七月二十九日に美濃守に任ぜられている。名前からも受領名からしても、この史料の表題自体が問題なのである。また、康綱時代の文書は四〇点が知られるが、元和から以後は二点しかない。つまり残存する文書の発給量からすると、康綱の鋳物師支配は慶長年中で頓挫し、それゆえに彼以降の四代も鋳物師支配をほとんど放棄したと推察できる。支配の実態からしても、真継家が元和年中に整った形で鋳物業の免許者を帳簿にまもっていたとは考え難いのである。

次は養田氏が出された寛永一八年（一六四一）の『諸国釜屋所』である。これに關係して養田夷氏は「真継家文書の高岡の項に登録

されている北国惣代の矢木田三郎右衛門藤原家重と大工北野源右衛門藤原国光とは、そもそもどういう人物であるのか。また新興都市高岡が開町三十年後において早くも越中国の筆頭となり、北国惣代の鋳物師と認められるようになった理由は、一体なんであるのか。いや高岡が北国惣代であるかのように後世伝えられているが、実際は利長が招致した矢木田三郎右衛門藤原家重という人物が当時の第一人者であって、当時北陸一帯における代表として北国惣代に相應しく、真継家としてはこの矢木田を惣代に任命したのだと考えるのが自然であろう」と述べ、当時の真継家の力が相当強かったと想定している。

高岡の鋳物師は慶長一六年（一六一一）に前田利長に西部釜屋から召されて、金森弥右衛門・喜多彦左衛門・藤田与茂・金森与兵衛・金森藤左衛門・般若助右衛門・金森九郎兵衛の七人衆がその後の釜屋町に移ったとされる。もし前掲のように元和年中に矢木田家重が北国惣代となっていたのなら、高岡に移るとほとんど間を置かないでこの役割を負ったことになる。

ところで、寛永一八年段階の真継家の当主であるが、この年の七月二十八日に康利が死んでいる。その子供の親賢は元和八年（一六二二）に生れた。この時は満で一九才である。しかしながら彼は真継家を相続すると間もなく青蓮院尊純法親王の坊官谷家を相続してしまった。もしこの時点で真継家が鋳物師支配で順調な収入があったのなら、親賢がわざわざ自分の家を捨てて他家を相続する必要はないと考える。康綱が慶長年間鋳物師の支配に関する文書を出すのを大体止め、次の康利が例幣使としての役割を中心にして生活し、鋳物師支配のための活動を全くといっていいほどしていないことは、この可能性を強く示唆するものであろう。寛永一八年（一六四一）

に真継家が「諸国釜屋所」なる調査をし、独自に北国惣代を任命したとは考えられない。事実この兩人の鑄物師支配に関する文書は真継家文書の中にほとんど残っていないのである。

つまり、真継家の当時の状況からするならば、真継家が元和年中もしくは寛永一八年に鑄物師に自らの意志をもって北国惣代の役割を肩寄せたとは考え難い。

註

- 1 網野善彦「偽文書について―その成立と効用―」(『書の日本史』第四卷・平凡社・一九七七)・「鑄物師」(『講座日本の民俗』第五卷・有精堂・一九八〇)
- 2 拙稿「近世初期における真継家の真継家支配―宗弘と真継家―」(『名古屋大学文学部研究論集』史学三〇号・一九八四)
- 3 拙稿「真継康綱と佐久鑄物師大主家」(『信濃』第四〇巻第三号・一九八八)
- 4 拙稿「真継康綱をめぐって」(『日本歴史』第五〇〇号・一九九〇)
- 5 拙稿「三川牛久保の鑄物師と真継家」(『信濃』第三三巻第九号・一九八一)
- 6 拙稿「近世の鑄物師と鍛冶」(『講座・日本技術の社会史』第五巻採鉱と冶金・日本評論社・一九八三)・「近世の鑄物師と真継家」(『歴史学研究』五三四号・一九八四)
- 7 拙稿「真継康綱をめぐって」, この論文の表には本稿で触れた喜多家の二点の文書は含まれていない。
- 8 『高岡銅器史』二八九頁

四 鑄物師と惣代

それでは、数ヶ国にわたる惣代のような役割を真継家が肩寄せた

例はないのだろうか。次にこの視点から北国惣代の問題を見てみよう。

まず、越中の鑄物師自体から検討しよう。永和二年(一三七六)の斯波義将内書案写の中に「越中国野市金屋鑄物師」の名前が見える。また同年七月十一日の斯波義種奉行奉書案写には、都(砺波郡鑄物師と射水郡鑄物師が散見する。一四世紀の末までに越中に鑄物師がいたことが文書的に知られるのである。

一方、作品の方から見たらどうなのであろうか。坪井良平氏の研究を元に確認しておこう。永享四年(一四三二)に鑄造された現在新潟県糸魚川市にある経王寺の鐘は、「越中国前沢金屋大工藤原末次沙弥了性」によって作られたが、これが越中における中世鑄物師の本貫を鐘銘に現わした最古のものとされる。しかも前沢金屋(黒部市前沢)に住んだこの人物はこれより五年前、応永三四年(一四二七)に越中州新河郡布世保の千光寺の梵鐘を鑄造している。文明六年(一四七四)には「大工藤原朝臣佐味荻生住幸善」が新川郡太田保面白寺鐘を鑄造している。荻生も現在の黒部市荻生で前沢の近隣である。

次に新湊市の放生津には既に南北朝時代の後半に鑄物師がいたと思われるが、永正三年(一五〇六)になって、砺波郡般若庄毘沙門堂鐘に始めてその名前が見られる。

つまり、越中では戦国時代までに各地に鑄物師が住むようになり、一人で職業を独占するような体制は作られなかったのである。

近隣の加賀国では、至徳二年(一三八五)四月三日付けの加賀国守護富樫昌家書下に山代庄内金屋鑄物師が見られる。また永正九年(一一五三)の白山御宝前鐔口の銘に「大工久安住人藤原重家」とある。久安は現金沢市である。

有名な能登国中居(石川県穴水町)の鋳物師の作品としては石川県羽咋市本念寺にある梵鐘がある。応永三四年(一四二七)に鋳造した鐘が破損したため、永禄九年(一五六六)に中居の大工が改鋳したものである。これより先明応八年(一四九九)に作られた新潟県白山神社の鐘も中居の鋳物師が鋳造した。ただし能登の鋳物師の作った能登鼎はこれより早くから文献に現われる。その最古のものは一世紀後半成立の『堤中納言物語』だとされる。また一〇六四年頃成立した『新猿楽記』には能登釜が出ている。これらは中居で作られたものだろう。

越前では、丹後黒部八幡の元享四年(一三二四)に作られた鰯口に「越前国大工 山辺遠正」とあり、次いで大永三年(一五二三)四月一八日に鋳られた福井県丹正郡の看景寺鐘が、「新原住」の大工藤原朝臣彦左衛門吉久の手になる。新原は志比原の当て字で吉田郡志比庄である。さらにこれより遅れて現武生市五分市の大工が現われる。また室町時代の後半に大野市にも鋳物師が居たことが知られる。

若狭では応永四年(一三九八)になって、旧遠敷郡太良庄金屋(現小浜市)の鋳物師の作品が知られるようになる。

越後では、福島県法用寺の鐘を文明六年(一四七四)に「大工越後国蒲原郡大崎住 妙実」が鋳造している。この鋳物師は三条の鋳物師である。また作品は一口も残っていないが、室町時代の後半、刈羽郡大窪村(現柏崎市)にいた歌代姓の鋳物師の鐘を作っていた。

このような北陸地方の鋳物師の動向からすると、戦国時代までに越中の鋳物師が北陸筋に特別な権益や指導力を持っていたとはいえない。また坪井良平氏の「日本の梵鐘」などからすると、中世に矢木田を姓とする鋳物師の活動は知られない。

それでは全国的視野で見た場合に、北国惣代のような例はあるのだろうか。永享四年(一四三二)三月一日、備後国海部鋳物師の三郎左衛門は守護の山名時熙から国中大工職を安堵された。こうした事例はいくつか見られるが、これに関係して網野善彦氏は「中世的な供御人組織崩壊の過程で、十五世紀半は一つの時期を画している。一国的な鋳物師組織と大名によるその特権保証は、いよいよ明確にその姿を現わしてくる」と結論付けている。ただし目下のとこ

ろ越中では一國大工職は確認できない。

嘉禄二年(一三二七)一〇月七日に六波羅御教書が発せられ、鎮西鋳物師に対する公事催促が命じられたが、この鎮西鋳物師は太宰府に属した鋳工の系譜を引き、のちに宰府鋳物師とも言われた独自の鋳物師集団とされる。南北朝内乱も末期に近付いた頃、九州二島鋳物師(鎮西鋳物師)を統括し、年貢課役を催促する宰府惣官職は、太宰府の支配者の下文によって下された。天文一八年(一五四九)九月四日、太宰府鋳物師年貢注文が書かれたが、この中には「九州惣官大工東藤右衛門尉安秀」とあり、九州で鋳物師組織が依然として維持されていたことを示している。

宝徳元年(一四四九)閏一〇月一日、上杉憲忠は「和泉河内両国鉄鋳物師」が関東で商売することを禁じた。このことからして和泉と河内の鋳物師が一つのまとまりを持っていたと推察される。

天正一五年(一五八七)正月一日、徳川家康は「駿遠両国鋳物師惣大工職」を金屋の七郎左衛門に与えた。これら徳川家康の権力の裏付けと、それ以前の今川氏の領国のあり方と関係するであろう。以上が元和以前における私の知る、国を越えての鋳物師の組織、大工職である。古くからの伝統、もしくは経済的なまとまり、さらには強力な戦国大名の領国でもない、このような役職・役割はで

きないと考えられる。そこで、各地に多くの鋳物師がいて営業をしている北陸に、全体をまとめる組織ができていたと私には思えない。いくつかの国の惣代が真継家から付与されるようになるのは、近世中期になって鋳物師の支配を再興した珍弘の代である。既述のように高岡の鋳物師の北国惣代の役割が確認されたのも宝永二年（一七〇五）十一月二日の珍弘の代である。正徳四年（一七一四）六月一日、真継珍弘は備中国哲多郡新見の吉田与右衛門に五ヶ国の惣代を申し付けた（2—98—2）。また、周防国古敷郡小郡柳井田の武波平兵衛には、天明五年（一七八五）七月に康寧によって防長両国筆頭役の任命書が出された（A1—60—8）。安芸国安芸郡海田船越の植木源兵衛には安政五年（一八五八）二月に能弘より芸美両国筆頭役の任命書が出された。

ここに見える珍弘・康寧・能弘は、いずれも近世の真継家の鋳物師支配を再興したり、拡大した人物である。¹⁸真継家側が鋳物師の支配を拡大しようとする時に、惣代を任命する文書が出ていることは注目される。高岡の鋳物師に対する北国惣代の任命もこの真継家の動きと連動することは疑いない。

註

- 1 『中世鋳物師史料』二〇頁
- 2 同右二二頁
- 3 坪井良平『日本の梵鐘』一六〇頁（角川書店・一九七〇）
- 4 『中世鋳物師史料』二二頁
- 5 『日本の梵鐘』二八三頁
- 6 『日本の梵鐘』一九〇頁
- 7 長谷進『中居鋳物史』四一頁

- 8 『日本の梵鐘』一八三頁
- 9 『日本の梵鐘』二八一頁
- 10 『日本の梵鐘』二八三頁
- 11 『中世鋳物師史料』二二頁
- 12 網野善彦『日本中世の非農業民と天皇』四九五頁（岩波書店・一九八四）
- 13 同右四四七頁
- 14 同右四七九頁
- 15 『中世鋳物師史料』六九頁
- 16 同右二二二頁
- 17 同右一五四頁
- 18 拙稿『近世の鋳物師と鍛冶』（講座・日本技術の社会史 第五巻 採鉱と冶金 日本評論社・一九八三）

おわりに

真継家の戦国時代から近世にかけての動き、越中および北陸の鋳物師の動向からして、元和年中（一六一五—二四）、もしくは寛永一八年（一六四一）までに、実質として矢木田氏が北国の鋳物師惣代の役割を持っていたり、真継家によって北国惣代を新たに任命されたとは考えられない。それでは何故に宝永二年（一七〇五）に高岡の鋳物師は、真継家から北国惣代に正式に任じられたのであろうか。

従来、真継家の鋳物師支配は「真継久直の時代から支配基盤が、着々と固まってきたわけであるが、実質的には、室町時代頃から明治の初めに至るまでの長期にわたり地方鋳物師を支配した」とか、「江戸時代に入り、家康公の支配許可を背景にして、しだいに勢力を強め、江戸初期から中期頃に最盛期をむかえるのである」²⁰、「真継

家は、近世を通じて諸国鋳物師の大部分を支配したのであるが、江戸中期以後から幕末にかけて支配力も弱まり、しだいに衰退していった³⁾などというように理解されてきた。こうした理解によれば、江戸時代の初期に真継家の鋳物師支配は最盛期なので、高岡に北国惣代の役割を任命することも可能ということになってくる。恐らく養田氏の記述もこのような通説に支えられているものと思う。ところが既に本稿でも記したように、近世前期には真継家の鋳物師支配は、近世の中でも弱く、真継家が北国惣代を独自に任命する可能性は少ないのである。

それでは宝永二年（一七〇五）段階はどうなのであろうか。珍弘を養子にした玄弘は貞享元年（一六八四）七月一日に没した。康利から玄弘に至る四代にわたってほとんど鋳物師支配をしていなかったのを、珍弘が再興した。珍弘については正徳五年（一七一五）の「公役雑録」など、多くの日記が残っているが、その記載を見ると鋳物師の側からの訴えが前提になって対応している。つまり、珍弘は鋳物師の側の要求に沿って鋳物師と連絡を取りながら、支配をしているのである。真継家の鋳物師支配の根拠とされる鋳物師職許状も、広い商圏を必要とする鋳物師が、藩の枠に取り込まれないで活動するために朝廷の権威を利用しようとする意図と、それに真継家の経済的な理由が加わって、双方の利益のもとに成立したと見るべきであらう。

ということになると、宝永二年の北国惣代という役割も、高岡の鋳物師の要求に従って真継家が与えた可能性が高い。こうした時、鋳物師の側では自分たちがそれだけの家柄だという由緒を真継家に提出して見てもらうのが普通である。正徳四年に鋳物師職許状を得た時は高岡鋳物師側で戦国時代から持ち伝えた仁安の牒を出し、こ

れを見て珍弘は鋳物師の家を再興するようにとの許状を出した。鋳物師の側の由緒は鋳物師の側が提出するのであって、真継家の側でこれを直接調べるわけではない。もし、高岡鋳物師が北国惣代職を要求するとなると、それだけの由緒を用意しなくてはならないのである。しかしながら宝永二年の下知状を見るかぎり、この時にそのような証拠書類が出された形跡はない。この時には出されずにいたが、何らかの根拠は必要である。そのために高岡では矢木田三郎右衛門・藤原家重なる人物を持ち出したと推察する。こうした帳簿に見える人名は事実を伝える可能性があるので、少なくとも矢木田氏は戦国時代までは活動した鋳物師であらう。しかもこの時に高岡鋳物師が利用をしていることから、矢木田氏は高岡鋳物師に関係したか、当時矢木田氏は既に家が絶えていたか、あるいは鋳物業を止めていたと考えられる。由緒ある名前の脇に北国惣代と記してこれを自分たちが北国惣代を得る由緒に利用したのではないだろうか。

これまで、全国の鋳物師を支配した真継家というイメージが強く、真継家はきちんとした鋳物師支配のための組織を持っていたように考えられてきた。ところが高岡等に残る史料などから、真継家の家臣なるものは、珍弘の代（許状等を出したのは貞享五・一六八八）享保一八・一七三三）に向井幸助・清田市郎兵衛、量弘の代（明和六・一七六九）天明二・一七八二）に梶浦順蔵・山家寛次郎、康寧の代（許状を出したのは天明三・一七八三）文政一〇・一八二七）に星野但内（但見・伝之進・嘉内）と加藤陽介（丈之助）、能弘（同嘉永四・一八五一）明治七・一八七四）の時代に鈴木新兵衛・本多内膳・井上平兵衛といった様々な名手が見える。明らかに家臣の家はつながっていないのである。

安政四年（一八五七）に真継則能が書いた「鋳物師記」によれば、

小野將監（元は清水谷家の雑掌、当時は隠居）を六月に佐野天明（栃木県佐野市）に指し遣わすために急遽雇ったし、素姓もよく分からぬ程島彦十郎なる人物が自分から働きかけると、これに応じて関八州鋳物師取り調べ役に任命した。そのうえ地方からやって来る鋳物師に会うときには自分の家を使わず、会見の時にも「山科退蔵」なる人物のほうが必要な役割を負っている。

こうした状況からして、真継家にはしっかりした家臣といえるような者、鋳物師支配のための専門の家来が居なかったようである。ほとんど代が替わるたびに、適当に人に依頼して鋳物師支配のための役人を雇っていて、家に従う家臣を持っていない。数代にわたって真継家の鋳物師支配に当たった者はいないのである。しかもその時々で鋳物師の支配に関係する人は大体二人に過ぎない。この少ない人数で、全国の鋳物師に連絡を取り、許状などの文書を出している。だから、鋳物師の側で自分の家の古さなどを誇る証拠の文書を持つてきた場合には、真継家としてこれをチェックすることはできず、そのまま認めるのが実際のところであつたらう。特に鋳物師の支配を改めて始めたばかりの珍弘の初期ではそうであつたと考えられる。

真継家が高岡鋳物師を北国惣代に任命するということだけ見ると、もし高岡鋳物師に従わない者があつた場合には、何らかの制裁措置を真継家は取ることができると理解されがちであるが、真継家にはそのような力は全く存在しない。ただ単に下級の公家であるということと、従来鋳物師を支配してきた家柄という権威のみで、鋳物師職許状等を出しているのである。我々は真継家による全国鋳物師支配のための文書、その権威に目を奪われがちなのであるが、その支配はこの程度のものであると認識すべきであらう。真継家の鋳物師

支配は、むしろ鋳物師の側の要求に沿うような形で形成されたものであり、真継家の絶対的な力のもとに組織されたのではないのである。

それならば、高岡の鋳物師の場合、矢木田氏の問題はどのような意味を持つのであろうか、坪井良平氏は伊勢桑名の鋳物師として有名な中川家が所蔵していた「諸国鋳物師文化以前名前写」を複写したが、それを見ると「仁安本紙宝永十一年二月、北国頭役ノ下知状有、矢木田三郎右衛門」という記載は、金森弥右衛門の上にきている。

この史料は「平兵衛所持也」とあるので、真継家の最後の時期に鋳物師支配にあつた井上平兵衛にかかわるものかもしれない。養田氏が写真であげた井上史料の記載もこれによく似ている。ほかの箇所からすると、これは金森家が矢木田氏の子孫、もしくは関係者だと主張しているように理解される。しかし、それが強い主張にならなかったのは、金森氏が北国惣代を独占していないことで明らかである。この北国惣代の肩書きは高岡鋳物師全体が持っていたが故に、宝永二年に高岡鋳物師惣中として認められたのである。同じように大工北野弥右衛門藤原国光は喜多万右衛門の家で主張した可能性がある。また、喜多家では康綱などの文書をうまく利用すれば、高岡鋳物師の筆頭としての立場を得られたはずであるが、それもしてはいない。高岡の場合には一つの家が強大な力を持つという形を持たなかったのだ、高岡鋳物師全体として矢木田三郎右衛門と北野弥右衛門の名跡を共有したのであろう。この点北陸などにおける集団としての鋳物業のあり方とも関係する。

高岡鋳物師は慶長一六（一六一一）に西部から移って来た。西部にはその後も鋳物師が居住しており、いわば高岡鋳物師は北陸の鋳物師の新参者だった。この高岡の鋳物師たちが広い範囲にわたって

商圏を確保したり、他の鋳物師たちのうえに立つためには、たとえ権力はなくても、古くからの鋳物師の權威になりうる真継家によって、何らかの特別な役割に任ぜられたり、特別なつながりを持つ必要があった。鋳物師の需要者にとっては、実態はなくても公家の真継家から北国惣代を許された高岡の鋳物師と主張されれば、それだけで技術的にも優れた鋳物師と感じられたであろう。

ちょうど高岡の鋳物業がある程度の隆盛を見せていた頃、真継家では珍弘の代になり、収入源として鋳物師支配に着目していた。高岡鋳物師はこれにいち早く応ずる形で、戦国時代ぐらいに活躍した矢木田三郎右衛門藤原家重を持ちだし、北国惣代の肩書きを自分たちで付けて真継家に書類を提出した（ひょっとすると、実際に戦国時代に矢木田氏は真継久直あるいは康綱からこれを任じられていたかもしれないが、それは実体のないものであったろう）。鋳物師の実態を知らない珍弘は、この求めに応じて宝永二年（一七〇五）に高岡の鋳物師に北国惣代を任命したのではなからうか。高岡の鋳物師はこの肩書きを利用して、北陸の鋳物師の上に立つようにし、商圏も拡大させた可能性がある。

もしそうだとすると、この策は近世における高岡の鋳物師の発展に大きく寄与したことになる。逆に真継家としてはこのような鋳物師の動きをみて、鋳物師職許状による鋳物師支配へと突き進んだのであろう。

このように考えることができるならば、高岡鋳物師にとっても、真継家にとっても宝永二年の北国惣代の確認は、大きな意味のあることだった。それだけに今後このような地域における鋳物師の動きを洗い出していかなければならないだろう。

註

- 1 中川弘泰「近世鋳物師社会の構造」四七頁（近藤出版社・一九八六）
- 2 同右四九頁
- 3 同右一〇〇頁
- 4 拙稿「真継家の関八州鋳物師取り調べ役をめぐって」(1)・(2)（信濃）第四三巻一〇号・第四四巻二号一九九一・一九九二
- 5 「高岡銅器史」二八六頁

付記

本稿執筆にあたっては、相木芳彦氏と喜多万右衛門のお世話になった。末筆ながら深謝する。